

推量助動詞 — 「概言のムード」 —

鄭麗盈

はじめに

「何でも人間属の世界には、夏目漱石という大文豪がいて、彼には『吾輩は猫である』なる表題の、戯文調の小説があるそうだ。戯文仕立てとはいえ、これはなみなみならぬ傑作であるらしい。『・・・そうだ』とか『・・・らしい』とか、曖昧な言い方をしたが・・・」（『ドン松五郎の生活』井上ひさし）。日本語の表現は曖昧でいつもはっきりしないなどと言われているが、その原因の一つは上の例文のように「ソウダ」や「ラシイ」などの助動詞が日本人の会話あるいは文章に頻繁に出ているからかもしれない。この点を確認するためにこのレポートでは、モダリティー表現の推量の言い方について考察しようと思う。寺村秀夫氏の『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』（1989）によれば、推量助動詞は二つの種類に分けられているようだ—「概言のムード」と「説明のムード」である。ここではまず「概言のムード」に関して探求して、また次の機会に「説明のムード」を研究することにする。寺村氏によると、「概言のムード」というのは、「ある事態の真偽について、それを自分が直接見たり、経験したりしたのでないから確言はできないが、自分の過去の経験、現在もっている知識、情報から、概ねこうであろうと述べる」（傍点ママ）（Ⅰ）表現である。それを踏まえて推量助動詞「ラシイ」、「ヨウダ」、「カモシレナイ」、「ニチガイナイ」について個々別々の特徴と使い方を詳しく見てみよう。

1. 「ラシイ」

「ラシイ」の解釈はおよそ次のA B C の三つに区別できる：

A. ～といわれるだけの諸条件を十分に備えている様子。例えば、

①この数日は忙しくて、食事らしい食事をとっていません。

②彼はサッカー界の天才らしい足捌きで、観衆を魅了しました。

B. [俗] 前の文を受けて、確かにその判断が成立するに違いないということを表す。例

えば、

③「きょう、彼は欠席かな？」 「うん、らしいね」

C. [体言およびそれに準ずるものに、また、動詞・形容詞の終止形等に付く] 述べる事柄が話し手（書き手）の相当確実な推定によるという気持ちを表す。転じて、断定的な言い方を避け婉曲に表すのに使う。例えば、

④雨が降り始めたらしい。

⑤髪の毛は長いが、どうやら男らしい。

(Ⅲ、Ⅳ)

以上三つの「ラシイ」は使われ方は違うけれども、同じく話者がある出来事に対して自分の感想や判断を表す場合である。ここでは、本論文の目的に従って推量のCの「ラシイ」に重点を置いて見てみよう。この「ラシイ」は、森田良行の『日本語の類意表現』によれば、「他者側の問題に対する推測で、すなわち本来は外部に判断の根拠となる事柄があって、それに基づいて下す推量判断」である。例えば、次の例文を見てほしい。

⑥その翌晩、安田が、また客をつれてきた。例によって客を送り出してから、

「どうだい、お時さんは今日はお休みだろう？」

と八重子に言った。

「今日はお休みどころじゃないわよ。一週間ぐらい休むらしいのよ」

八重子が眉を上げて告げた。

(『点と線』 松本清張)

この問答から見てみると、八重子はお時さんが一週間くらい休むということを100パーセント確定できないものの耳にしたお時さんの最近の状況あるいは何かの手掛かりをたよりにそれは「ほぼ」事実だと判断している。

⑦毎日ああして遊んで暮らしているところを見ると、随分金を持っているらしい。

⑧田中さんがあんなにやせてしまったところを見ると、あの仕事はよほどきついらしい。

⑦は、「随分の金を持っていなかったら毎日ああして遊んで暮らしていることはできない」と逆に考えると、話者の話しているときの気持ちがさらにわかるであろう。つまり、仕事をあまりせずにぶらぶらして遊んでばかりいる状況から、「お金持ち」だと思わざるを得ない事態であるにとらえている表現である。⑧では、話手は自分自身の目で「田中さ

んがあんなにやせてしまった」ということを見たために、従って、「あの仕事はよほどきつい」と推測がつくのである。今までの実際の状況、事物の様子を基にして、何か実際に根拠があって判断を下しているのである。また次の例文を見てみよう。

⑨東京大学に入るのは、容易ではないらしい。

⑩今、あそこへ旅行に行くのはちょっと危険らしい。

⑨の場合は、話手自身が外国人で日本の大学の入学試験の状態をよく知らないために、単に「東京大学に入るのは容易ではない」と言って断定を下すことができないので、上で見たような「ラシイ」の働きが発揮される。それで話者は人伝に聞いたことから、「東京大学に入ること」が「容易ではないらしい」ととらえるのである。同じく⑩は、別に自分自身が実際に「あそこ」へ旅行して、ひどい目に会ったのでもないものの、人々の噂やニュースを聞いたりして、様々な情報を集めた結果、「ちょっと危険らしい」という結論を与えるのである。

以上述べたことから見ればある事柄に対して自分の推測、判断を表す、あるいは確信がないために断定を躊躇する場合に「ラシイ」は用いられる。まとめると、話手は外在的な環境に基づいて、個人的な考え、判断を展開させ、客観的に婉曲的に、また聞き手に受け入れやすいように表現することができる。それが「ラシイ」の働きであろう。

2. 「ヨウダ」

次に「ヨウダ」を見てみよう。

①彼はまるで日本人のように、流暢に日本語を話す。

②以前どこかでお見掛けしたようだ。

以上用いられた二つの「ヨウ」については、使い方あるいはその意味の相違は明かであろう。ある物事が他のものと似ている時、①の“比況”の「ヨウ」が使われる。②の「ヨウ」は「不確かな、又は婉曲な断定の意味を表す」(Ⅲ)“推量”の助動詞である。ここでは、推量の「ヨウ」に注目しよう。

③この腕時計はどこかで見たようだ。

④どうも彼の様子が普通ではないようだのだ。

⑤私には彼女の気持ちがよくわかるような気がする。

寺村秀夫(1989)によれば、「ヨウダ」は「視覚、聴覚、その他の感覚により得た情報、あるいは周囲の状況も考慮に入れて推量した結果」だという。「ラシイ」が何か明確な裏付けがあって推量するという働きをもつのに対し、「ヨウダ」はさらに主観的、個人的な断定を表すものである。③の「ヨウダ」をもし「ラシイ」に置き換えると「この腕時計はどこかで見たらしい」ようになるが、この文では腕時計の主人公は話者自身ではなく、第三者(例えば「彼」や「あの人」)がどこかで見たということになる。さらに、阪田雪子・倉持保男の『文法Ⅱ』では、同様の例文からの「ヨウダ」を「話手自身が見たということを表すのだとすれば、自分は記憶していないが、他の人から「君も見たことがあるはずだ」などと言われて、どうやらそうらしいと思わざるをえないような場合に限られる」と述べている。④と⑤においても別に客観的な根拠もなく、ただ何となくそう思わざるをえないことを表しているのであろう。④では、話者は彼が病氣にかかったのだと耳にしているのに、彼の顔色や素振りなどを見て、どうも普通ではないと自分の視覚や感覚によって判断しているのである。⑤も同様で、はっきりとした証拠もなく、「相手の気持ちがよくわかる」という直感があって用いた「ヨウダ」であろう。以上の例の「ヨウダ」は確かに頻繁に使われている。

⑥中年男は、疲れた妻に飽いて、とかく他の女に興味をもって走り勝ちであるが、許すことの出来ない背徳行為である。日本の家族制度における夫の特殊な座が、このような我欲的な自意識を生み出す。世間の一部には、まだこのような誤った悪習を寛大に考える観念があるようだ。これは断じて打破しなければならない。

(『張込み』の「一年半待て」 松本清張)

⑦「それは益可笑しい。今君がわざわざ御出になったのは増俸を受けるには忍びない、理由を見出したからのように聞こえたが、その理由が僕の説明で取り去られたにもかかわらず増俸を否まれるのは少し解しかねるようですね」

(『坊っちゃん』 夏目漱石)

ところで、以下の例文を見てみよう。

⑧国語学者の宮島達夫氏の調査によれば、『源氏物語』に用いられている単語の総数は一万一千四百二十三語だという。僅か一万一千数百種類の単語である膨大な源氏五十四帖が書かれたのだ。一万語というといかにも多いようだが、現在なら九歳児ぐらいの語彙量だ。

(『日本語をみがく小辞典〈動詞篇〉』 森田良行)

寺村秀夫は日本語の推量表現の大半は証拠的モダリティであると述べている(V)よう

だが、上の例⑧のように、別に自分の目で見ただけでもなく、誰かの話を聞いたのでもなく、証拠がある訳ではないのだが単に自分の考えを表わそうとする推量表現もありそうである。

「ヨウダ」の意味と用法がほぼ同じものに「ミタイダ」があるが、ただ「ミタイダ」の方は口語的でくだけた感じがあるようである。にもかかわらず、「ヨウダ」から「ミタイダ」に置き換えられない場合もあるようである。

⑨疲れたようなら、しばらくお休みになってもいいんですよ。

⑩彼が行くようなら、ついでにこれを届けてもらいたいです。

要するに、他人の意志・感情を断定を避けて表そうとする場合なら、「ミタイダ」の方より、「ヨウダ」を使う方がふさわしい。(Ⅱ)

3. 「ダロウ」(デショウ)

「ダロウ」一言およびこれに準ずるもの、更に動詞・形容詞とその型に活用する助動詞との連体形に付く。話手(書き手)の推量によってその事柄を述べている意を表す。

a. 動詞・形容詞の終止形を受ける。例えば、

①今晚雨が降るだろう。

②あの人は来るだろう。

③きっと美しいだろう。

④広東料理は美味しいだろう。

b. 体言及び助詞「の」を受ける。例えば、

⑤あの木は漆だろう。

⑥甘い物を食べ過ぎたから、虫歯が出来たのだろう。(Ⅲ)(「広辞苑」)

寺村秀夫によれば、「ダロウ」は元来がダの推量形で、その性質を保ちつつ、助動詞として独立の用法をもつようになったものである。「ダロ+ウ」のように「デショウ」は「デス」の未然形と分解されている(デショ+ウ)。ある程度の証拠に基づいて、判断の客観性を相手にほのめかすという意識のある「ラシイ」と「ヨウダ」に対して、「ダロウ」

は自分個人の知識や経験だけによって下す主観的な判断だと言えよう。

- ⑦もうじき秋になるだろう。
- ⑧そんな所は誰も行かないだろう。
- ⑨車があったら便利だろう。
- ⑩欲しいものは本だろう。
- ⑪冬の日本は寒いだろう。
- ⑫あの映画は面白いだろうと思う。
- ⑬あの人はもう国へ帰っただろう。
- ⑭事故で両親を失って悲しがっただろう。

⑦～⑪は、話手がそのような推量判断を現在下したということを直接的に表すものである。しかも、現在のこと、未来のことのみならず、過去の事柄や既に実現していると思われる事柄についての推量ならば、⑬と⑭のように「～タダロウ」の形を使う。「ダロウ」はそもそも主観的な色彩の濃い推量助動詞だが、⑫のように、文末に「～と思う」を添えれば、それは自分の意見だとその判断を客観化してとらえることになる。

⑮きまりきった単調な繰り返しである。あるいは単調な日々の繰り返しだから平穏無事なのである。今に、石井の出現という災厄がこの均衡を破るだろう。

(『張込み』 松本清張)

⑯だから、年中飛び回っている蠅や蚊等は、生涯「棲む」ことはないだろう（もっとも、ある地域を限って、その範囲内でのみある類が棲息するような場合なら「この山には珍しい蝶が棲んでいる」のように言うだろう）。

(『日本語をみがく小辞典〈動詞篇〉』 森田良行)

⑰「矢須子さんのあの日記、あそここのところ、省略した方が宜しいのじゃないでしょうか。あの頃なら、黒い雨のことを人に話しても、毒素があることは誰も知らないので、誤解されなんだでしょう。でも、今じゃ毒素があったこと、誰でも知っています。あそここのところを清書して出すと、先方で誤解するんじゃないでしょうか。」

(『黒い雨』 井伏鱒二)

⑱だが、「喜ぶ」は、「喜んでお引き受け致します」とか、「ますます御健勝の段お喜び申し上げます」とか、あるいは「合格を喜ぶ」のように外から舞い込んで来た情報や働き掛けに対して反応する点では、極めて受身的な精神活動と言えるだろう。

(『日本語をみがく小辞典〈動詞篇〉』 森田良行)

⑮は事柄の行き成りの判断であるが、⑯～⑱は、話が婉曲になったという雰囲気も感じ

られているだろう。「ダロウ」は、「推量」とはいうものの、自分の考えをかなり強く押し出す意識に支えられていることは、上の「ダロウ」を、たとえば、「ラシイ」とか「ヨウダ」に言い換えてみればそのおかしさはすぐ気づくことであろう。(Ⅱ)

4. 「～カモシレナイ」

- ①成功しないかもしれないが、やってみます。
- ②あそこはにぎやかかもしれない。
- ③今晚早くねむれるかもしれない。
- ④山田さんのお妹さんは彼女かもしれない。

断定は出来ないが、そうなる(する)見込みがあることを表す(Ⅲ)場合は「～カモシレナイ」を用いる。「ラシイ」や「ヨウダ」などと比べれば、「～カモシレナイ」の方がよりはっきりとした根拠がない断定だと言えそうである。

- ⑤ところが「僕には家族がある」とか「妻のある身」という言い方が一方にあって、それで、私たち妻や子供を物扱いするとは怪しからんなどといきり立っている人もいるかもしれない。(『日本語をみがく小辞典<動詞編>』 森田良行)

またほかの推量の言い方と比較すれば、話者があまり自信がなく、確信を持っていない心的状態で、用いる判断であろう。例えば④では、話手は「彼女は山田さんの妹さんかもしれないですが、間違えているかもしれませんよ」のような確信のない気持ちで、つまり相手が自分の推測を100パーセントの事実だと信じては困るというようにほめかしているのだろう。そのように考えてみれば、「～カモシレナイ」はかなり主観的な推量の言い方だとも言えるし、異なる角度から見ればあまり責任を担わなくてもいい言い方だとも言えよう。

- ⑥朝の掃除がはじまる。座敷、廊下、玄関、庭。二時間はたっぷりかかる。吝嗇な夫は掃除にも口やかましいかもしれない。しかし、この家には、世間みな平和がまだあった。(『張込み』 松本清張)
- ⑦松木さんはいつでも疎開できる身でありながら、自分がスパイだと疑われるかもしれないと警戒して、一所懸命、町の人の世話ばかりやいて毎日のように駆けずりまわっている。(『黒い雨』 井伏鱒二)
- ⑧仲間のはなしによると、犬には春生まれがもっとも多く、以下、秋、冬、夏の順にな

っているそうだが、おれの生まれたのは、いちばんその例の少ない夏、去年の夏の七月である。おれの性格が多少ひねくれているとしたら、そのせいかもしれぬ。

(『ドン松五郎の生活』 井上ひさし)

ところが、「～カモシレナイ」は推測としてのみだけではなく、自分の意見や主張や提案を和らげて婉曲的に相手に伝えたい場合にも用いられるようである。例えば、次の例を見てみよう。

⑨久しく音信のない旧友と旧交を温めてみるのもいいかもしれない。

(『日本語をみがく小辞典<動詞篇>』 森田良行)

⑩これはきたないので、洗った方がいいかもしれません。

⑩A：「明日、海に行きましょう！」

B：「うん、いいかもしれないね」

先方にすすめたいとき、ことに相手は先輩や先生など目上の人だったら、⑩のように「洗ってくれ」と言うより、「洗った方がいいかもしれません」というような穏やかな態度をとった方がいいであろう。ちなみに、筆者が日本人の友達を遊びに誘ったとき、⑩のような状況に気がついた。相手がうれしそうな顔をして言下に爽やかな声で「うん、いいかもしれないね」と答えてくれたら、大体「うん、行きましょう」という意味であったが、ためらっているような顔をして「うん、いいかもしれないね」と言った後「ごめんね、でも用事があるって行けないの」と言う場合も中にはあったのだ。これは筆者の個人的な経験だが、相手を傷付けないような言葉遣いに気を使っているのは日本人の民族性の一つかもしれない。

5. 「～ニチガイナイ」(「～相違ナイ」)

①あれからもう二十年もたっているんだから、あの人も私のことを忘れてしまったにちがいない。

②彼も合格しなかったというのだから、大学の入学試験というのはよほど難しいに違いない。

③事件発生当時、彼は現場のすぐそばにいたのですから、きっと何か知っているにちがいない。

④彼女の卓球は、あの手つきから見ると、大分上手にちがいない。

「～に相違ナイ」の方が、「～ニチガイナイ」より形式的だが、両方とも同じく話者があるものや事柄をほぼ100パーセントに近い割合で信じている場合に使用する。ほかの推量助動詞と違って、「～ニチガイナイ」は確信の度が高そうである。また、まったく情報や根拠がない場合あるいはたよりになる裏付けを得ていない状態では「～ニチガイナイ」は使えないと言えるだろう。①～③では、話者の下している判断の理由がはっきりしている：

判断	理由
①あの人も私のことを忘れてしまった	あれからもう二十年もたっているから
②大学の入学試験というのはよほど難しい	彼も合格しなかったから
③（彼は）きっと何か知っている	事件発生時彼は現場のすぐそばにいたから

④では、話手がさらに実際に自分の目で「あの手つき」を見てから、間違いなく、「上手にちがいない」と判断している。もし「～カモシレナイ」や「ダロウ」などに言い換えると、「～ニチガイナイ」の例文に表されているような口調の強さまたは有効性は減退するであろう。

⑤「・・・それでぼくに事件はその前日の十八日に起こったと推定させた。はたして、調べたら、その日君は、店を休んでいた。まだ詳しく言いたい君には無用のことだろう。ただ種々の想像を加えて、君は新宿を十二時二十五分の準急に乗ったに違いないと思った。この列車はK 駅には三時五分に着く。・・・」

（『張込み』の「地方紙を買う女」 松本清張）

⑥要するに、ぬるま湯につかった思いでじっとひそやかに勤め上げるのか、大過ない教師の道であるというわけである。古今の格言や処世訓を全部一つ鍋に入れてグツグツ煮つめたら、右のような生き方が万能薬として生まれるにちがいない。

（『日本人の論理構造』 坂板元）

しかも、「～ニチガイナイ」は婉曲な意味があるかもしれないが、「～カモシレナイ」や「ヨウダ」ほどではなからう。例えば、前章「カモシレナイ」の例文⑨は、もし「久しく音信のない旧友と旧交を温めてみるのもいいにちがいない」と置き換えると、柔らかい口ぶりから人になるほどと納得させるような言い方になるであろう。要するに、「～ニ

「チガイナイ」は人に自分の自信のもっている推測を確信させる迫力があると言える。

- ⑦「吹く」は、「風が吹けば桶屋が儲かる」と三段論法のたとえにもよくひかれるが、これは、どの世の因果はめぐって思わぬ結末を招くものだとの因果律を伝えたものだ。どうも現在の身の不運やうだつがらぬ原因は、それなりにあるにちがいない。

(『日本語をみがく小辞典〈動詞篇〉』 森田良行)

- ⑧なまじ英語を知っていたために大恥をかくというのは、たしかに起こりうることである。だが、片言でもしゃべれるということによってプラスの結果が生じることも少なくないし、むしろその方が多いのではあるまいか。ないよりはるかにましであるにちがいない。(傍点ママ) (『日本人の論理構造』 坂板元)

6. 「ラシイ」、「ヨウダ」、「～カモシレナイ」、「～ニチガイナイ」と「タ」の関連

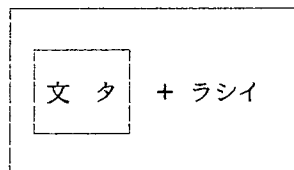
次に推量助動詞と時との関わりについて考えてみよう。

ア. 「ラシイ」

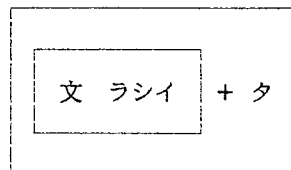
最初に、「ラシイ」の例文を見てみよう。

- ①木箱はますます速さを増し、奥さんの声は瀬音に消されて聞こえなくなった。奥さん自身も木箱を追うのはよしにしたらしい。(『ドン松五郎の生活』 井上ひさし)
 ②つづいて石ころ先生も車を降りた。どうやらそのへんに学校がいくつかたまってあ
るらしかった。(『ドン松五郎の生活』 井上ひさし)

「ラシカッタ」は「ラシイ」＋「タ」の形であるが、単独の「ラシイ」ほど日常的にはあまり使われていないようだが、上の②のように実際に使われることもある。①の場合は、もし「よしにするらしかった」に換言すれば、奥さんはいまだに「木箱を追うのはよしにする」ということを行っていないというニュアンスを含むようになる。同様に、②は、「学校がいくつかたまってあったらしい」と言い換えると、「昔はかたまっていたが今もうなくなった」というふうに聞こえるようになる。ともかく、どちらの形をとるかは話者の発話時における表現内容、意識によるものである。これは「ラシイ」がモダリティ表現の一つであり、話者の発話時における瞬間的な心的態度を表すものであることを裏付ける。これは以下のように図示できる。



現在の推量



その時の推量

イ・「ヨウダ」

③事故があったと聞いてすぐあそこへ行ったが、何もなかったようだ。

④事故があったと聞いてすぐあそこへ行ったが、何もないようだった。

③④では、傍線部はどちらも同じ命題内容を受けているように思われるが、③は「事故があったと聞いてすぐあそこへ行った」ということを「現在の時点において『何もなかったのだ』と回想して判断しているものであり」（Ⅱ）、④はあそこへ行った時何もないと判断したということを述べているものであろう。ところが、前章「ヨウダ」の例文②の場合は、「以前どこかでお見掛けするようだった」と言い換えることはできないだろう。

⑤・・・だが、どうも日本語の「食う」には、自分から積極的に餌や食べ物をあさって喉にほうり込むといった能動性はなかったようだ。

（『日本語をみがく小辞典〈動詞編〉』 森田良行）

⑥タカの家族一従来、タカが闇売りに来て雑談で云っていたところによると、タカの亭主は満州事変で戦病死。たった一人の倅は、山口県柳井町附近の軍関係の特殊学校のようなところに入っている。それが如何なる種類の機関であるか、タカは日ごろ説明を避けていたが、倅がそこにいることを母親として唯一無二の誇りにしているようであつた。

（『黒い雨』 井伏鱒二）

⑦部屋のなかは涼しくて気持がよかった。お父さんは煮たぎる釜の蓋を取った。そのとき戸外で青白い光が凄く閃いた。東から西に向け、つまり広島市街から古江の裏山に向って飛び去ったようであつた。

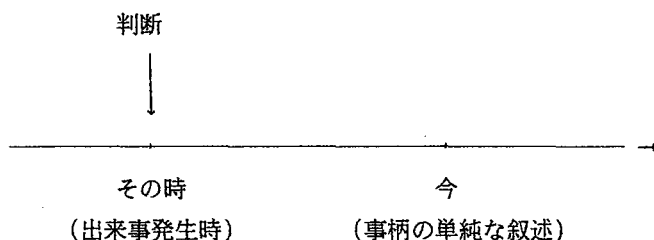
（『黒い雨』 井伏鱒二）

③と④について説明したように、⑤の「～ナカッタヨウダ」の判断の時点は「今」であり、⑥の「ヨウデアッタ」という判断の時点はその出来事の発生したとき（その時）である。ところが、⑦はどう解釈すればいいだろうか。次の例を見てみよう。

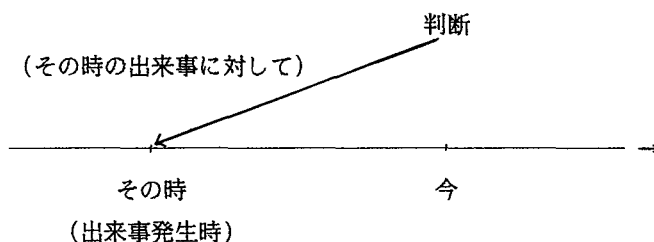
⑧島田さんの話によると、伊藤さんはあのパーティーに行かなかったようだった。

「行かなかったようだった」の「ダッタ」は私の「島田さんの話を聞いたとき」に置ける自分の判断に対する現時点からの回想を表している。つまりその判断の時点は「今」ではなくて、「島田さんと会って話した時」である。更に分かりやすいように言えば、⑧では、話者は「島田さんの話を聞いた時、『伊藤さんはあのパーティーに行かなかった』と自分がそう判断を下した」と回想している。以上述べたことをまとめて図式で整理してみよう。

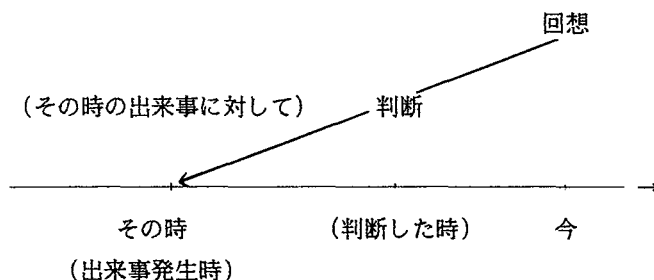
「～ようだった」の場合は、



「～たようだ」の場合は、



「～たようだった」の場合は、



⑨一きり音楽が済むと、踊りの群が崩れた。石井はボックスに坐った。あとに従った瀬

子が、ちらりと太市の方を見たようだったが、気づいたのか気づかぬのか、知らぬ顔をしていた。
(『張込み』の「投影」 松本清張)

ウ. 「～カモシレナイ」

⑩「あらもうお帰りでございますの？」

川井は朝子のその顔を細い眼の隅でさりげなく見た。いつもより蒼い彼女の顔色を見取ったかもしれない。
(『張込み』の「声」 松本清張)

⑪そこは木柵からはみ出した石炭の崩れが一めんに敷いてあったが、その一部分が少しだが乱れていた。ちょうど、何かの物体で撫で崩したという感じであった。

「事件から五日もたつからね。原形がこわされたかもしれないね」

(『張込み』の「声」 松本清張)

⑫いろいろな型の自動車が走ってゆく。三原は興味のないその流れを見てぼんやりしていた。退屈だから頭脳の思考が働いたのかもしれない。彼は口の中で、あっとつぶやいた。
(『点と線』 松本清張)

⑬あの女は必死にぼくを抱きこもうとした。ぼくはまた、懸命にそれから逃れようとした。あんな女と一緒にあった時の、ぼくの生涯の暗澹とした、悲惨な生活を思うと、勘らなかった。もしそういう羽目になったら気が狂うかもしれない。ぼくの彼女に対する殺意は、こうして生じたのだ。
(『張込み』の「顔」 松本清張)

近藤泰弘の「ムード」によれば、「推量」である「カモシレナイ」は過去型がないとされているようだが、しかし⑫と⑬のような例を見れば、「カモシレナカッタ」も使われているようである。「～タラシイ」と「ラシカッタ」の関係のように、「タカモシレナイ」と「カモシレナカッタ」のどちらを用いるかその出来事の時点と話手自身の心的状態によるものであろう。⑩では、もし「いつもより蒼い彼女の顔色を見取るかもしれない」と置き換えると「『今は見取っていないが、いつか／将来に見取るかもしれない』とその時そう判断した」というように判断の時点だけでなく、文の意味さえも変わる。同様に、⑪では、もし「原形がこわされるかもしれない」と言い換えれば、その意味の違いは明かであろう。⑬の「もしそういう羽目になったら気が狂うかもしれない」では、「その時は『気が狂うかもしれない』と判断を下した」と今述べている。が、もし「もしそういう羽目になったら気が狂ったかもしれない」のようになれば、その判断の時点における自分の感情についての生き生きとした描写といった雰囲気はなくなるし、判断の時点も「その時」から「今」になってしまうであろう。

エ. 「～ニチガイナイ」

- ⑭そう言えば、人に望むのも、当方の期待だけで結果は相手任せだ。望まれて興入れす
 と言う。結婚の申し込みを受けたのだから積極的働き掛けがあったにちがいないが、
 それを「相手が望むから」と期待の実現の形で表現するところが面白い。

(『日本語をみがく小辞典〈動詞篇〉』 森田良行)

- ⑮「私が検札にまわったから知っています。その人が連れの人の切符もいっしょに持つ
 ていて出しました。連れといっても、上役といった感じでしたね。少し威張っていま
 したよ。瘦せた方は、その人にすごく丁寧な様子が見えましたよ」

「じゃ、その、下役といった人が、電報を頼んだわけですね」

「そうです」

—安田辰郎の電報の代人はわかった。その上役という男こそ、××省の石田部長に違
いなかった。下役というのは、お供の事務官か何かであろう。(傍点ママ)

(『点と線』 松本清張)

「～ニチガイナイ」と「タ」の関連は、「～カモシレナイ」の場合と似ているとも言え
 るだろう。つまり⑭ではもし「・・・積極的働き掛けがあるにちがいなかった」と置き換
 えれば、「その時は『きっとある』と推量した」と言うことになる。⑮ではもし「・・・
 ××省の石田部長に違いない」となると、推量の時点は「その時」ではなくて、「今」に
 なるであろう。「～ニチガイナカッタ」は日常会話ではあまり使用されていないようだが
 以上の例のように小説や文章で現れることもあるようである。

おわりに

以上、「概言のムード」に関する推量の助動詞の意味、使い方に関して、いくつかの文
 献資料や筆者の経験から得られたいろいろな文例を分析し、それらの助動詞間の比較も試
 みた。しかし、これらの助動詞が表す意味内容は、微妙なところも多く見られ、結論を明
 言することは易しくなく、ややもすると主観的な考察になったかもしれない。それは、も
 ちろん筆者の日本語の実力不足に負うところも大いにあるが、またそれ故に、この考察は
 筆者の研究意欲を駆り立て、大いに有意義であったと言えるであろう。

最後に各推量助動詞と「タ」（過去形）との関連について研究した部分は、例えば「～
 たようだった」や「～かもしれなかった」の意味（ニュアンス）あるいはその語感の微妙
 な相違について述べてみた。近藤泰弘氏は「カモシレナイ」の過去形がないとされている
 が、物語作品の中では実際に「カモシレナカッタ」といった例がいくつか見られたのであ
 る。しかし、確かに筆者の経験からも、「カモシレナカッタ」は「日常的」には使われて

いないようである。そして、今回の考察では、このような例は、松本清張の小説の中だけで見つけれられたものであり、それは作者の文体的な特徴の一つであったのかもしれない。

そのほか不十分なところは沢山あると思うが、何とかこのレポートを仕上げる事ができた。先生や友人達からも多くの貴重な意見と指導をいただいた。この場を借りて心から感謝します。

参考文献

- I. 寺村秀夫 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版 1989
- II. 阪田雪子・倉田保男 『文法Ⅱ』 国際交流基金 1985
- III. 金田一京助、見坊豪紀、金田一春彦、柴田武、山田忠雄 『新明解国語辞典（第三版）』 三省堂 1988
- IV. 西尾実、岩淵悦太郎、小谷静夫 『岩波国語辞典（第四版）』 岩波書店 1989
- V. 近藤泰弘 『日本語と日本語教育第四巻 日本の文法、文体（上）』 明治書院 1990

引用文献・資料

- 松本清張 『点と線』 新潮社 1985
- 松本清張 『張込み』 新潮社 1982
- 森田良行 『日本語をみがく小辞典〈動詞篇〉』 講談社現代新書 1988
- 板坂元 『日本人の論理構想』 講談社現代新書 1988
- 井伏鱒二 『黒い雨』 新潮社 1989
- 井上ひさし 『ドン松五郎の生活』 新潮社 1987
- 夏目漱石 『坊っちゃん』 岩波書店 1989
- 庄野晴己 (香港理工学院日本語コースのテキスト) 1988